

『阿弥陀経』に学ぶ

『阿弥陀経』に学ぶ 目次

『阿弥陀経』の構成 ————— vii

『仏説阿弥陀経』書き下し文 ————— viii

一 浄土三部経とは何か ————— 1

経題について 2

人と生まれて 6

有縁の法 9

五正行 12

親鸞聖人の浄土三部経の見方 16

真実の教 22

現在の救い 25

二 『阿弥陀経』 29

経典翻訳者 30

序分について 31

無問自説経 33

難信の法を説く 35

仏大悲の教説 37

三 証信序 43

六成就 44

『阿弥陀経』はどこで説かれたか 48

祇樹給孤独園が表しているもの 50

「四苦八苦」ということ 53

現実と宗教のはざままで 54

会座に集う人々 56

対告衆舍利弗 61

四 正宗分 65

正宗分の内容 66

浄土とは 71

当来の報土 76

浄土莊嚴の世界 78

指方立相 81

五 依報莊嚴 85

宝樹莊嚴 86

教えに開かれる心 89

七菩提分 91

親鸞聖人を支えた三つの言葉 93

四宝 98

樹が表すもの 101

宝池莊嚴 103

八功德水 105

天樂地華莊嚴 114

化鳥風樹莊嚴 120

風樹莊嚴 124

六 正報莊嚴—阿弥陀仏・声聞・菩薩—
127

私たちの身の現実 128

阿弥陀仏とは 135

本願の称号 138

声聞 144

菩薩 146

よき人との出遇い 148

七 本願の仏道

155

聞法と念仏

156

すでにして悲願います

161

念仏と本願

163

光明名号の因縁

167

仏願の生起本末

169

現に証あかしされる救い

173

諸仏の証誠と護念

175

念じ念じられていく道

179

八 流通分

181

阿修羅について

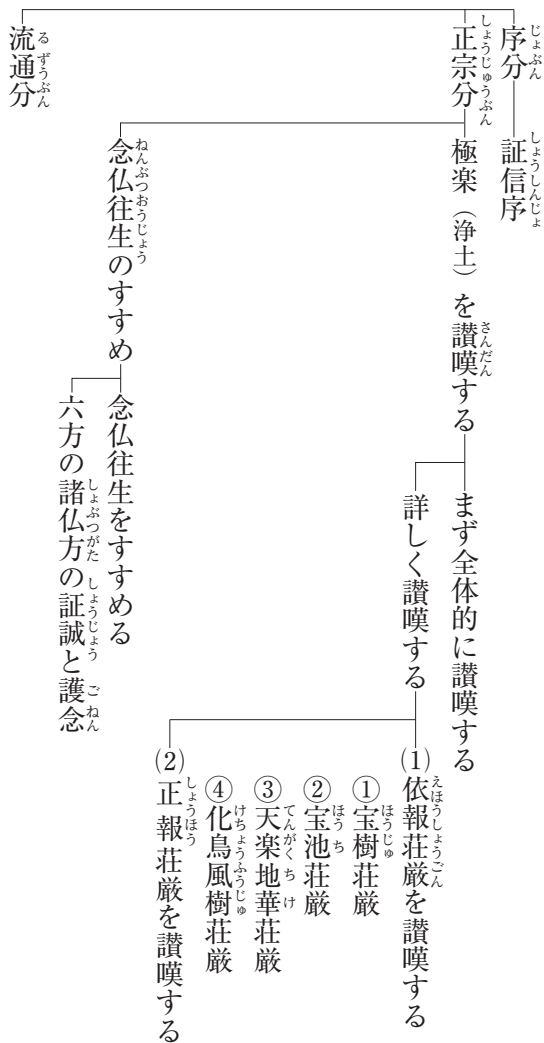
182

おわりに

184

・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

『阿弥陀経』の構成



※ 依報…環境

※ 正報…主体とも説明されるが、『阿弥陀経』で言えば阿弥陀仏と聖衆(声聞・菩薩)のこと。

※ 構成は東本願寺出版発行『真宗聖典』の科文を元に、著者が作成した。

一 浄土三部経とは何か

経題について

釈尊が、舍利弗、舍利弗と、ある意味で一方的に呼びかけ続けられて、教えが説かれていく経典が『阿弥陀経』です。『阿弥陀経』は浄土三部経の中の『阿弥陀経』ですから、はじめに「浄土三部経とは何か」ということを確かめておきたいと思いません。

三部経とは、『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』、『仏説阿弥陀経』の三つの経典を言います。これは不思議だと思うのですが、八万四千あると言われるお釈迦さまの経典の中から、この三つの経典が選出されたということは、誰かが作為的に選出されたというわけではないでしょう。そしてまた、この『阿弥陀経』が訳されてから約一六〇〇年の間、ずっと人々に読まれ続けてきているということも、不思議です。

最初に経典の題についてですが、親鸞聖人は、『仏説無量寿経』を『仏説無量寿経』とは、まったくと言っていいほどおっしゃっておられません。『仏説無量寿経』とお呼びになっているのは、私の記憶では一箇所だけです。ほとんどが、『大無量寿経』とか『大経』という呼び方です。これは、決して『無量寿経』を略しておられる

わけではないのです。むしろ『無量寿経』に説かれております内容に即して、親鸞聖人は『大無量寿経』、あるいは『大経』と呼ぶ方が相応しいと、そういうことでそのように表現しておられるわけです。それから『観無量寿経』についても、そのようには一度もおっしゃっておられない。『無量寿仏観経』や『観経』とお呼びになつておられます。

そういうことでは、かなり強引つらいんと言えは強引なんです。そのように題が付けられているからそのように呼ぶということではないわけです。他の方々が『無量寿経』と呼んでおられるものを『大無量寿経』と呼ばれてみたり、『観無量寿経』とほとんどの人が呼んでおられるものを『無量寿仏観経』と呼ばれてみたり、それくらい大胆なのが浄土仏教の流れだと私は受け取っているのです。ある意味、そういうことでなければ浄土仏教が生まれてこようがなかったのではないかと思えます。

なぜ仏教の中から浄土仏教が生まれてきたのか。それは、人々が命を懸けてか仏陀ぶつだの教えに救いを求めていかれた、その勇氣と大胆さ。そういうものが、仏陀の教えの中から浄土仏教を聞き取ってきたのでしょう。普通、客観的に仏教をとらえる立場からしますなら、浄土教は仏教ではないと。こういう取り方が多いのではないでしょう

か。しかしそうではなくて、お釈迦さまが本当にお説きになろうとなさったことはお念仏の教えだと。これを言い切ってこられた方々の勇氣と救いを求める情熱がなければ、お釈迦さまの教えの中からお念仏の教えを聞き取るということはできなかつたと思います。

『無量寿経』と呼んでおけばいいじゃないかと思うのですけれども、親鸞聖人は、それでは『無量寿経』の意がいただけけない。『大無量寿経』、あるいは『大経』と呼ぶのが相応しいと。『観無量寿経』も、『観経』と呼ぶか、『無量寿仏観経』と呼ぶか、どちらかでないとい自分は題としていただけえない。そういうことですね。いまは『観経』についてはおいておきますが、なぜ『大経』とお呼びになるのかにつきましては、「大」は大乗だいじょう仏教の「大」であり、どのような人にとっても教えという意味を持つ経典が『無量寿経』という意味でだと、私は受け取っています。

そして最後は『阿弥陀経』です。『阿弥陀経』については親鸞聖人も、『阿弥陀経』と、こうおっしゃっておられます。しかし、それもただそのままおっしゃっておられるということではなく、『阿弥陀経』という経典は、阿弥陀あみだぶつとは何か、ということを私たちに明瞭にお示しくださっている経典なのだと。そういう意味を込めて、親鸞

聖人は『阿弥陀経』と呼んでおられるのだと思います。

『阿弥陀経』の中で、〃舍利弗、舍利弗〃と説いておられる釈尊が、突然「舍利弗、汝が意において云何」（真宗聖典二二八頁）、〃舍利弗よ、お前わかっているのか。どう思っているのだ、とおっしゃられている箇所があります。そして、「かの仏を何のゆえぞ阿弥陀と号する」、なぜ西方の仏さまを阿弥陀仏と言うのか、とおっしゃっているわけです。そして、さらにそれに続いて、「舍利弗、かの仏の光明、無量にして、十方の国を照らすに、障碍するところなし。このゆえに号して阿弥陀とす。また舍利弗、かの仏の寿命およびその人民も、無量無辺阿僧祇劫なり、かるがゆえに阿弥陀と名づく」と説いておられます。このように、非常に凝縮されたかたちで、私たちを救う仏さまをなぜ阿弥陀と言うのかということ、仏陀が舍利弗に問いかけるようになさって、仏陀ご自身がお答えになっておられる。このようなところからも、『阿弥陀経』という経典は、阿弥陀仏を教えてくださったとされている経典だと言えるかと思えます。

そういう意味では、浄土三部経それぞれの、親鸞聖人がお呼びになっておられる経題というのは、親鸞聖人がそういう経典として出遇っておられるといたただかれるのではないかと思えます。『無量寿経』には、『大無量寿経』として出遇っておられる。

『観無量寿経』には、『観経』あるいは『無量寿仏観経』として出遇っておられる。『阿弥陀経』には、阿弥陀仏を教えてくださいとさっている経典として出遇っておられる。これが親鸞聖人の経典の呼び方でしょう。

人と生まれて

一六〇〇年以上もの間、ずっと三部経は読まれ続けてきた。さまざまな時代を貫いて、さらには国を越えて浄土三部経は生き続けてきた。それは三部経が、そういうものを持っているからなのではないでしょうか。

時代を貫き国を越えて、無数の方々が、それに人生の課題を問い、生涯それに学び導かれていかれた。自らの課題を浄土三部経にぶつけていかれたと言ってもいいのではないのでしょうか。

私たちはさまざまな問題を抱えて生きていくわけです。大きく申しますなら時代社会の問題があります。どんな時代でもその時代時代の緊迫した問題があるわけでしょう。いまの時代で申しますなら、災害とか、原発の問題等、大変な問題を抱えております。そういう問題を抱えて、うろたえながら人間は生き続けてきたんだろうと思います。

ます。

そしてまた、お釈迦さまはどんな人でも抱えている問題として「四苦しよく」ということをお教えてくださっています。四つの苦しみをどんな人でも抱えているのだということですから、「生老病死しょうろうびじょうし」です。仏教では一般的に、これが代表的な、誰もが抱えている苦しみであると教えられているわけです。それに対して、これは浄土教のおそらく独自なところだろうと思うのですけれども、その生老病死に「愛別離苦あいべつりく」を加えて、五苦ごくというところが教えられています。どのような人も抱えている、もつとも苦しい問題を五つの苦しみと。そのことは、先ほど申しました『観無量寿経』の中に説かれています。

私は田舎のお寺の住職をさせていただいているのですが、四十軒ほどのご門徒さんのうち今年も九軒でお葬式がありました。田舎ということもありまして日ごろからお付き合いがありますから、特にお通夜とかでは、亡くなられたご門徒の方とのあれこれを思い出して、つい泣いてしまうこともあります。そのようなお葬式のご縁の中でふっと思ったのです。人間というのは、自分が積んできた経験を一生抱えて生きていくんだなあ、そして、その中でも特に愛別離苦の苦しみは、生涯解けない問題として

抱え続けていくんだらうと。そんなことを、最近感じさせられたということがありました。

そしていま一つ、最近気づかせられたことを申しますと、生老病死の生苦しょうく、これがずっとわからなかったのです。生苦ということで、お釈迦さまは何をおっしゃっておられるんだらうかと。これまで、それには二つあると教えられてきました。一つは私たちは生まれてきたということに対して、自分自身に根拠を持っていない。気づいてみたら生まれてきたということからくる苦。もう一つが、お母さんの産道をくぐってくる時の苦しみを、どこかに記憶しているんだと。そのことからくる苦。そのように教えられてきたのですけれど、いま一つよくわからなかったんです。しかし、このところ歳をとってきまして、こういうことではないかと気づかせられたわけです。自分の人生は何だったんだらうかという人生に対する問い。あるいは、自分は何のために生まれてきたのかという問い。何かそういう問題を私たちはどこかに抱えているのではないかと思うのです。それは気分となつて問われているような問題でありますけれども、それが自分の人生を覆おおっている。そういう問題を生苦とおっしゃったのではないだらうかということなのです。

生老病死、それから愛別離苦。さらには時代の問題とか、さまざまな問題を抱えながら、人々がこれまで一六〇〇年以上もの間、本当に納得なっとくできる人生はどこにあるのか。そういうやむにやまれない問いを、浄土三部経にぶつけてこられた、問い続けてこられたのではないか。そして浄土三部経を通してそれに対する、答えを見出し、いかれたのではないか。このように生きることが、人間として生きることなのか、そういう確信を、浄土三部経を通して得ていかれた。そういう經典が、浄土三部経であると申してよろしいのではないのでしょうか。ですから、一六〇〇年以上もの間ずっと今日まで伝えられ続けてきているわけでしょうし、おそらくこれからも伝えられ続けていくのではないのでしょうか。一言で言えば、浄土三部経とはいのちの經典と申してもいいのではないかと思います。

有縁の法

多くの人々が、生涯それに学び、導かれ続けてきた教えということですが、そのような教えを持つことの大切さを、「有縁うえんの法ほう」という言葉で示してくださったのが、中国の善導ぜんどう大師という方です。人間にとって、有縁の法が大事だと。ここで「法」と

いうのは教えという意味です。有縁の教えですね。生涯学び続けていくことができる
教えのことです。その善導大師の言葉を、親鸞聖人がお引きになっておられます。

行者ぎやうじゃまご当たうに知るべし、もし解げを学まなばんと欲おもわば、凡ほんより聖しやうに至いたるまで、乃至ないし仏果ぶつが
まで、一切さいわり碍ざわりなし、みな学まなぶことを得うるとなり。もし行ぎやうを学まなばんと欲おもわば、必ず
有縁うゑんの法ほふに藉よれ、少すくしき功くわう勞らうを用もちいるに多おほく益やくを得えればなりと。

〔「教行信証」「信卷」真宗聖典二一九頁〕

「もし解げを学まなばんと欲おもわば」、それを略りやくして「解げ学がく」と言いわれています。解げを学まなぶ、
これは知識ちしき的な学まなびのことです。

仏教ぶつがうを知し識しとして学まなぼうとするのならば、凡ぼん夫ぶのことから菩ぼ薩ざつ（聖しやう）のことまで、
さらには仏ぶつさまのことまでも学まなぶことができる。そして、その次つぎが大事だいじです。「も
し行ぎやうを学まなばんと欲おもわば、必ず有縁うゑんの法ほふに藉よれ、少すくしき功くわう勞らうを用もちいるに多おほく益やくを得えれば
なり」。この功くわう勞らうといふのはいわゆる苦く勞らうと同じ意味いみです。こちらは「行ぎやう学がく」と言いわ
れております。行ぎやうを学まなぶといふのは、知識ちしき的な学まなびに對たいして、私わたしの上に救きういが明らか
になつていくような学まなびです。道みちが明らかになつていく、生き方が明らかになつてい
くような学まなび。それが行ぎやう学がくと言いわれているわけです。もつと言いえば、悔くいることなく

いのちを終えていくことのできるような、そういう道が明らかになっていく学び、こう申し上げてよろしいでしょう。それには必ず有縁の法に藉れ、こうおっしゃっているわけです。

これは宮城顛みやぎしずかという先生から教えていただいたのですが、この文で一番大事なのは、冒頭の「行者当に知るべし」だということです。この言葉は行者に向かっておっしゃってくださいている言葉であって、学問として知識的に学ぼうとしている人にかけている言葉ではないということです。そうしますと、この言葉はどういたただかれるのかと言いますと、「行者当に知るべし」ですから、たとえ救いを求めて仏道を学んでいるとしても、もし藉よるべき有縁の法がなければ、結局は解学で終わっていくんだと。知識で終わっていくんだということです。そういう文でありましょう。有縁の法抜きに行学として仏道は学べない、人生が明らかになっついていかないのだということです。そういう意味で善導大師のこの文というのは、非常に大切な文でありましょう、厳きびしいお言葉だと思えます。

そういうことで、浄土三部経は、多くの方々がそれに学び、生涯導かれていかれた有縁の法としての經典です。もう一言加えさせていただきますなら、そのように申し

ますと、今日の私たちにとって、いきなり浄土三部経をいただくことは無理だと感じになるかと思えます。そういうことでは、私は、三部経の意を私たちに教えてくださる書物。生涯それに、私なら私が学び続けていくことのできるような、そういう書物。それも浄土三部経という呼び方の中に含めて浄土三部経を有縁の法だと、このように申し上げたいと思うでございます。

五正行

いま一つ申し上げておきますと、これも善導大師でありますけど、有縁の法についてののように学べばいいのかということ、非常に具体性をもって教えてくださっています。有縁の法をどのように学べば私たちの上に道が明らかになるのか、ということとを教えてください。それを「五正行」と言います。今日的に言えば、宗教生活の中身です。私の上に救いが明らかになっていく生活。それを善導大師は、生活の中に五つの行を持った生活、それが宗教生活だということを、『観経』にもとづいてお示しくださっているわけでありませう。

専ら往生経の行に依って行ずるは、これを正行と名づく。何ものかこれや。一心